

演題番号：D12

外科切除により長期生存を認めた脊柱管由来性悪性末梢神経鞘腫の猫の1例

○松尾芽衣¹⁾，左 享祐¹⁾，瀬尾浩和²⁾，中本美和¹⁾，中本裕也^{1) 3) 4)}

¹⁾ NeuroVets 動物神経科クリニック・京都市，²⁾ おいけ動物病院・京都市，³⁾ 大阪公大，⁴⁾ 京都大

1. はじめに：悪性末梢神経鞘腫 (MPNSTs) は、シュワン細胞、神経周囲細胞および神経内線維芽細胞に由来する腫瘍であり猫での発生は稀である。今回、第7-第8胸椎 (T7-8) 領域のMPNSTsと診断した猫において、外科切除実施後に長期で良好な状態を維持した症例を経験したため、その検査所見および経過について報告する。

2. 材料および方法：症例は日本猫、5歳5ヵ月齢、避妊雌、3.4kg (BCS 2/5) で既往歴なし。1ヶ月前から両後肢のふらつきおよび疼痛が認められ始めたことから、当クリニックへ紹介来院した (第1病日)。

3. 結果：第1病日の神経学的検査において両後肢の上位運動ニューロン徴候および背部痛が認められたため、第3胸髄-第3腰髄領域の脊髄障害が疑われた。原因精査のためMRI検査、CT検査を実施し、T7-8右側寄りの脊髄腫瘍が示唆された。第11病日に外科切除を実施し、病理組織学的検査からMPNSTsと診断した。術後から臨床徴候は消失したため第15病日に退院した。明らかな臨床徴候は認められなかったものの、第702病日に実施した術後2年の経過MRI検査およびCT検査にて再発を疑う所見が認められたため、第712病日

にFNAおよびTru-cut生検を実施し、病理組織学的検査からMPNSTsの再発と診断した。第732病日に再度の外科切除を実施し、第746病日現在は臨床徴候を伴わずに経過は良好である。

4. 考察および結語：過去の報告では、脊柱管由来性MPNSTsの猫の症例は3例のみであり、そのうち2例で再発が認められている。再発が認められた症例の生存期間は70日との報告だったが、本症例では臨床徴候を呈さない段階でMRI検査を実施したことにより再発の早期発見が可能となった。再発まで長期で良好な経過を維持できた要因として、腫瘍が初回の外科的治療時に概ね完全に摘出されていたことが推測される。猫のMPNSTsは皮下、鼠径、頭蓋で認められているが一般的に再発率が高いことが報告されている。脊柱管由来性のMPNSTsにおいても臨床徴候の有無に関わらず、MRI検査による経過確認が再発の早期発見および今後の予後に関与することが考慮される。症例の蓄積によるさらなる情報集積が望まれる。